平成十一年一月十九日　最終講義

法華経と私

望月海淑

最終講義という事ですが、私は、昭和三一年から本学の高等学校へ勤めたということです。私も自分の履歴をよく覚えておりませんので、その頃であろうなとしておいたものであります。本学にまいりまして、今のようにこんな立派な建物ではなく、木造二階建て、ガラスの所々がかけていて割れている。もちろん木造だけの教室でした。何故かその隅っこの方の、一番見晴らしの良い所に桜の木がありまして、今はもう残っておりません。大変大きな花の咲く桜で、綺麗な桜でした。高橋尭昭先生のお話しに出ました松木先生というのは学頭（現在の学長）でして、「桜はお前な、蕾のころが一番いいんだ」と言ってお酒を二升持ってきて花見をしました。二・三日して満開になりましたら「桜は満開が一番いいんだ」と、又二・三日しますとお酒を持ってきて「桜は散りぎわがいい」と言う。何の事はない一本の桜で三回花見をした。すごい学校へ入ったなと思ったものです。もっとも花見と言ってもヤカンでお酒をつけて茶碗で飲んでおしまいでしたから、どうってことはないんです。そういう学校でした。

そんな学校の隅っこに荻原・土田さんがお書きになった『サンスクリットの法華経』があり、古いもので上・中・下の三冊に分れておりました。当時身延山短大の中では里見泰穏先生がサンスクリットに関しては一番と風評された

方でした。この方に「あの「サンスクリットの法華経」は読まないのですか。」と聞きましたら、「誰も読まない。」と言われ、「何とかならないでしょうか。」と言うと、「じゃ一緒に読もうか。」と言われて私がガリ版を起こしてサンスクリットの文章を書きまして、他の先生方にもお配りして、里見泰穏先生を指導として読み始めました。それが実は私とサンスクリットの法華経との関わりをはじめた第一歩でした。里見泰穏先生それから室住一妙先生が必ず御出席になりました。後の先生は最初のうちは出ておりましたが、一人抜け二人抜け三回目か四回目になると他の先生方は誰も出なくなりました。私ども三人でサンスクリットをなんとなく物にしたような顔をしていたものです。したがって独学のサンスクリットです。自分だけで読んで来たという思い出があります。

そんなことをしているうちにいくつかの論文が出来上がりました。その一つが「見宝塔品における antarikāṣa と従地涌出品における ākāśa」というものです。この論文を書き上げましたら里見先生がお前今度の教授会の後で聞いてやるから発表しろと言われまして、先生方の前で発表致しました。そして今度は日本仏教学会で発表致しました。日本仏教学会には大学の講師以上でないと発表できないという資格制限がございました。当時私は講師ではありませんでした。学歴詐称で発表致しました。小さい部屋だったのですが、目の前に東京大学の中村元先生がおられてまいったなと思いつつ、かしこまって発表いたしました。サンスクリット語をふんだんに使った発表でした。日本仏教学会の年報を見ていただければ載っておりますが、その頃は海淑という名前ではございませんで、淑夫という名前でした。その後におきまして法華経との関わりが出来てまいりまして『法華経の話』『よくわかる法華経』『私にとって法華経は』というのを出版してまいりました。『よくわかる法華経』は大変に部数の売れた本で、原稿で売って損をしたと皆によく言われましたが、現在手に入れることは出来ません。『わたしにとって法華経は』というのは山喜房佛

書林から出版され、まだ現在は手に入れることは出来ます。『法華経における信の研究序説』というのは学位をいただきました論文です。今度いただいた学位の主な論文です。副論文は現在校正中の『法華経における信と誓願の研究』でございます。今年度中には完成する予定です。『わたしにとって法華経は』という本は、図書館に何冊か置いてありますので目にしたことはあるだろうと思います。

このように歩んできた私にとって、気になっているテーマが実はあります。それは妙法蓮華経の言葉、「我昔曾於二萬億佛所。爲無常道故常教化汝。汝亦長夜隨我受學。我以方便引導汝故生我法中。舍利弗。我昔教汝志願佛道。汝今悉忘。而便自謂已得滅度。我今還欲令汝憶念本願所行道故。爲諸鹿章聞説是大乗経。名妙法蓮華教菩薩法佛所護念。」であります。何故この言葉に関心を持ったのかであります。昔かつて、この言葉を私は非常に法華経を理解するのにおいて重要なことと考えております。それ以降例えば経典中より抜粋した言葉が書いてありますが、これらはすべて昔かつてという言葉に関わる内容の言葉です。'pūrva pranidhāna' はるかな・昔前生・前世において無上道の為の故に舍利弗を教化した。舍利弗は釈尊に従って学んできたんだ。方便を持って汝を誘導した為に舍利弗は今またこの娑婆世界に生まれ出てくることが出来ました。これが前半の部分です。舍利弗はインドに出生し、釈尊にめぐりあい弟子になった、これは歴史的事実なんだろうと思います。それだけを私達は考えておりましたが、でも実際はそうじゃあない。舍利弗が釈尊に教を受けたのははるかな昔でした。前世でした。どれくらい昔なのかということは私にもわかりません。はるかな昔です。そこで釈尊と舍利弗のかかわりがあったということを記憶しておいてほしいと思います。釈尊はそのようにして舍利弗に仏道を志願させ、前生において舍利弗はお釈迦様から教を受けて仏道を学んできたんだ。ところが、インドに生まれて来たら汝は悉く忘れている。前生においてお釈迦様にめぐり合った

という事実を全部忘れてしまっている。今滅度を得たりと思える。この滅度は nirvāṇa のことであります。なくなる事・吹き消えることです。だからローソクの火は吹くな、nirvāṇa になると言います。お釈迦様のこの滅度の事を述べる時には pari という前置詞がつきます。parinirvāṇa。釈尊の滅度、仏の滅度でございます。この pari はここでは付きませんでnirvāṇaで、釈尊以外の場合の滅度です。なくなる事と言いましたが、同時に迷いをなくす、悟りを意味します。すなわちよく言われる小乗のさとりも nirvāṇa だろうと思います。舎利弗が前世において学んだことは仏になるという方法なんです。

現在日蓮宗において誓願だと言っております。日蓮聖人は、建長五年の四月のその日に昇って来る太陽に向ってお題目を唱えて誓願をたてたというのですが、私は嘘だと思います。日蓮聖人は前生においてお釈迦様に会ってそこで誓願をおたてになった。そう言う捉らえ方が出来なければ宗教じゃないと思っています。本願所行道という前生においてお釈迦様のもとで立てた願を舎利弗にもう一度思い出してほしい、こう思うから、今法華経を説くのだ、となります。そうしますと、法華経というのは自分自身が前生において立てた願を思いおこす教えだと私は思っています。だからここで皆さんに申し上げているのは、ここで舎利弗という言葉を固有名詞で捉えてはいけないということなのです。法華経にめぐりあったその人が自分の名前としてとらえてほしい。それがないから建長五年になってしまうのです。日蓮聖人が願をおたてになって、法華経を一途にお説きになったことは、お釈迦様の所で願をおこされているからだ、とこう思っています。それは宗教だからであって建長五年に立てた願を果たす為だなんてことは決してありません。仏のもとで願を立てて、仏と共に歩むための願でなければならない、と私はそう思っています。これは譬喩品というお経の中にあります。この一句で非常に思い起こさせられました。いろいろな法華経の注釈書も論文も書い

てきたけれども、この言葉に気付いて、非常に法華経理解の意識が変わってきたと自分自身では思っています。従いまして、そういう事が本当に可能なのか、可能でないのかということを、これから申し上げていきたいと思っています。

その次のところに書いてありますのが（最終講義のレジメのこと）、私が法華経に対して問い続けたありようは、釈尊と私の関係にとどまるというものです。そういう観点から法華経を見た立場から書いたものが『私にとって法華経は』という書物です。日蓮宗新聞社発行の『正法』という雑誌に法華経を読むというのを連載中です。つい先日送った原稿は陀羅尼品でした。後二・三回で終わります。これもまた同じ立場をとって書いています。法華経を読むのに、法華経に対して書くのに、私にとって、私は、という言い方は本当はおかしいし、おこがましいことだと思っております。しかしこれを読む大勢の人達に私が法華経の中にいるべき所はどうなんだということを考えてほしい、そう思っているからであります。この中で何人かは出家なさるんでしょう。坊さんになるのになんとなくなったんでは困るんです。自分のやるべき仕事をお経の中からしっかりとつかまえてほしい。それでなければしょうがないんだ、ということをよく知って欲しいということで、私にとって今日のテーマも「法華経と私」です。わざわざそのように致しました。私のいるべき場所が法華経にあるのか、なければ私にとって法華経は要らないものなんです。あるのかどうなのかこれを尋ねるのが、宗教者としての道じゃないかと思っています。それを学問という衣を着せてカモフラージュしようと言うのが、今年度三月までの私のあり方です。四月になったら又ガラッと変わるかもしれません。三月まではそのつもりですということを申し上げて、それでは何故そのような読み方が出来るのかということをお話したい、こう思います。ここからがレジメの真中から下のところです。

例えば経典の中には必ず、如是我聞一時佛住とあります。これは法華経に限らず総ての経典に書かれております。偽物のお経もこうなっています。どれが本物で偽物なのかは、全部読んで内容を検討しなければわからないことなんです。ともかく私はかくの如く聞きました。ある時仏はどこどこに留まって、住んでおりました、ということです。この私はというのは誰なのかそれを考えてみます。一時佛住の一時はサンスクリット語の ekasmin samaya で ekasmin が数字の1、samaya が時という言葉です。samaya という言葉は龍樹が書いた『大智度論』、訳者は鳩摩羅什です。そこには実際の時間を意味しない所の時間で非時という意味だとあります。昔々あるところにおじいさんと、おばあさんがおりました。この昔々はいつだかわからない、でも誰も詮索しません。あれは明治五年だとか昭和七年だなんてそんなくだらないことはいいません。法華経の学問的な考察を致しますと、先程、高橋堯昭先生がおっしゃっていた、塔が出来て僧院の中に塔があるのは紀元前二世紀頃までで、紀元三世紀になると塔と僧院が離れたものになってくるということを、法華経で考えてみます。例えば方便品の中には子どもが仏の像を作るという話、あるいは普通の信者が指でもって仏の姿を書いたり、泥をこねて仏像を作った、そのことだけでも大変な功徳が得られるんだという話が書かれている。この話は方便品の偈の中に説かれていて、実はそれが法華経の成立年代に深くかかわって来る。これは、高橋先生がご専門で詳しいんですが、インドにおいて仏像が現れてくるのは紀元元年頃か、もう少し遅いのです。仏像が出来たのは紀元元年より遅いといい、仏像を造る習慣がないのにその法華経が仏像を造るといいます。これはおかしくありませんか。おかしいんです。サンチーの大塔は最初にアショカ王が造ったんだと言われています。アショカはお釈迦様がなくなって一〇〇年後に生まれたとされています。サンチーの大塔には欄楯手すりがあり、そこに彫刻が施されています。その彫刻のどの彫刻を見ましてもお釈迦様の姿は一体もないのです。そして

お釈迦様がおいでになる場所には菩提樹や、法輪が描いてあり、お釈迦様の足跡が描かれて、すべての人々はそれに向って礼拝をしている姿が描いてあります。そういう仏伝があってもお釈迦様は出ていない。これを姿なき仏伝図と言います。アショカ王の時代を想定致しますと紀元前二〇〇年から三〇〇年。そういう時代です。法華経の中心である方便品には仏像を作るとあります。しかし、仏像が出来てきたのは紀元元年頃になるのではないかといいます。成立的にはそうなるのですが、私が言いたいのは時間的なものを飛び超える工夫です。これが宗教者ではないでしょうか。時間的なものを飛超えてお釈迦様と私、あなた方ととつながるこのつながりをご自分の胸でしっかり把握して欲しい。これが私の念願です。

その中で序品にはこうあります。お釈迦様がお座りになりましたが何も言葉を発せられませんでした。おかしいなと思っていると大地が六種に震動し、お釈迦様の眉間から光がでて東方八万の世界を照らした。遠方の世界で、仏がおいでになると沢山の人が出てきて教えを聞いているそんな場面があります。娑婆世界におけるのと同じ世界が、無限に存在するわけです。これはおかしい、不思議なことだと弥勒菩薩が質問をしています。それに対して文殊師利菩薩がその質問に答えています。序品には、はるかな昔に日月灯明如来が法華経を説かれた、とあります。その時に弥勒菩薩も文殊師利菩薩も日月灯明如来によって法華経を説いていただいているんです。前生の話です。文殊師利菩薩はすばらしい話なので自分一人で聞いて覚えておくのはもったいないと、人に語って伝える努力をしました。弥勒菩薩は、いい教えを聞いたとおしまいにしました。それから何年か後に二人の菩薩は、再び生まれてきました。お釈迦様が黙ってお座りになって、大地がゆれ眉間から光を出した。弥勒菩薩はそれが何の事だかわからなかった。文殊師利菩薩は、はるか昔同じようなことが日月灯明如来の時にもあったから、今日はお釈迦様が法華経を説くに違いない

とわかったとあります。弥勒菩薩は人に伝えるという事を怠ったが為に、全部忘れてしまいます。序品にある二人が行った行わないということは、重要な事柄であります。ここでは、お釈迦様が法華経を説かれた以前に日月灯明如来によってすでに説かれていたということ。法華経はお釈迦様だけが説いたものではないということが重要であります。それから次は方便品であります。お釈迦様が法華経を説こうか説かないでおこうかと思案されます。法華経を説いたならばここにいる人々も、神々も恐れおののくだろうから説くべきではないのかもしれないと。それでは何故恐れおののくのでしょうか。それは今まで全く無いところのものを説くからだ、と私は理解をしています。ただ恐れおののくから説けないとこうおっしゃいます。すると舎利弗がそんなことをおっしゃらずに、説いて下さいとお願いを致します。そのお願いの中で、すでに遥かな前世において佛から教を受けてきたので、佛の言葉を信ずることが出来るという形を示しています。舎利弗は前世においてお釈迦様の教を聞いているので、私には下地があるんだ。その下地があるから、お釈迦様がどんなことをおっしゃろうと信じることが出来ます。だから舎利弗はお釈迦様に説いてくださいとお願いをします。それを受けてお釈迦様が法華経を説いたという形をとっています。その時始められた教が一佛乗だったのです。法華経には二個の大事があり、二乗作仏と久遠実成であるといわれます。又、二乗作仏ではなく一乗仏しかないといわれます。二もなく三もなしで、声聞・縁覚なんて元々無く、無いものを我々が形があるように幻をつかまえているだけなのだと。それが一仏乗ということであろうと理解するのであります。序品と同じように化城喩品にも出てきます。ここでは大通智勝如来が法華経をお説きになられました。その時説いたものが有名な三千塵点劫でございます。三千大千世界をすりつぶして塵のようにして、東に進んで持っていって百千の国を通りすぎて捨てつくしてまうという。その長い時間を三千塵点劫といいます。とても数えられないので、久遠といいます。同じよ

うな説示が如来寿量品にあります。如来寿量品の場合は五百千万億那由陀阿僧祇劫という、三千大千世界と比べると遥かに長い時間ですが、私は時間をとやかくというのではありません。法華経はある時には日月灯明如来によって説かれ、ある時には大通智勝如来によって説かれたという、こういう言い方がされていることが重要であります。ということは法華経はお釈迦さまがお説きになって始まったんだ、という理解では駄目だという事になります。仏教が出来たから法華経が出来たのではなくて、それ以前から法華経は無くてはいけないものなのです。その辺の鍵を握る言葉が阿含経の有名な言葉で、仏の出世未出世に関わらず、この法は常住なりという言葉です。仏が人間世界に生まれてきたから教えが出来たのではなく、生まれてこなくても教は元々あったんだ。この真実の常住に存在する教えをお釈迦様は、発見し見い出したからそれを言葉として展開したんだと。それが仏教の、お釈迦様の教であり、真髄が法華経なんだという理解だと思います。そうするとお釈迦様が説く前に大通智勝如来が説いたり、日月灯明如来が説いたりしたということは、当たり前でありうることなんだと考えることが出来ます。そのような立場を踏まえておりますから、多宝如来が見宝塔品においてお姿をあらわすのであります。多宝如来の誓願は、法華経が説かれるならば、どのような所であっても出現しその正しさを証明をするというものです。多宝如来は法を人格化した仏様であります。出現した多宝如来が座席の半分をお釈迦様に譲り、そこへお釈迦様がお座りになった。いわゆる二仏並座という形が出来上がるわけです。ただ二仏が並んで座っていても意味がありません。お釈迦様の出世、未出世に関わらず常住であるこの真実、その法を、お釈迦様が法華経というお経に展開し伝えてくれた。その法の正しさを証明するために見宝塔品の存在があるんです。法師品以降のお経はお釈迦さまの滅度の後、後の世においてどの様にしたらよいのか。仏は受持・読・誦・解説・書写せよとおしゃっています。仏は法華経を受持・読・誦・解説・書写する人がどのよう

な人かというと、それは前世において法華経にめぐりあって教えを受けてきた人だから、清浄の功徳を積んで立派な行いをしてきたのだといいます。立派な行いをしてきた人だからこの悪世である末法の世の中に生まれ出てくる必要がないのだと。娑婆世界にわざわざ仏が生まれてくる必要はないのですが、衆生をあわれむがゆえに自分の清浄の業の報いを捨てて、自分から願ってこの世に生まれてきたんだ、とこう説いているのが法師品なんです。

先程、高橋先生がおっしゃいました、仏塔を造るという話。仏塔は大乗のこの街の人々が造ったんだといいます。でもその人達が法華経を受持・読・誦・解説・書写する所には塔なんか建てるな、仏塔なんか建てるなというのが法華経です。じゃあどうするか。そこには chaitya 塔を建てよ。法華経を読み保つ人々がいる場所には、chaitya 寺を建てるべきである。そこには法華経の全身がある、如来の全身があるからであるというのです。だから stūpa ではありません。問題は鳩摩羅什がその言葉 chaitya も塔と訳したためにわからなくなってしまったのです。法華経をサンスクリット語で読むのと漢訳されたものを読むのとでは意味が違ってきます。法師品で説かれていることは、法華経の経典の中には、如来の全身があり総てがあるから、受持・読・誦・解説・書写をしなさいとあります。それがこの世に生まれてきて法華経の一句一偈にでも、おあいをした人々のなすべき仕事であると説いたのが法師品であります。他の人々を救うために自分が願って生まれてきた人であるという言葉の、願ってという言葉にご注目下さい。なんとなく来たんじゃなくて、自分から願って生まれて来たんです。

それから従地涌出品。見宝塔品以降の末尾において、お釈迦様はまもなく滅度に入るとおっしゃいます。亡くなってしまった後において、法華経を説く者がいますかというご質問をなさるんです。そうしますとご存知のように一緒におりました菩薩達が、私達が耐え忍んでも法華経を説きましょうと勇ましくおっしゃいます。お釈迦様はお前達頼

むよとはおっしゃいませんでした。そうして安楽行品をお説きになられます。あるがままの見方、ありのままに見るという立場にたてとおっしゃり、従地涌出品を説かれ大地の下から菩薩たちを涌き出させて、その人々が法華経を説く人々であると指名をなされるのです。大地の下に虚空という世界があります。ここでお断りしておきますと見宝塔品にもこの虚空という言葉が出てまいります。ところが見宝塔品をサンスクリット語で見ていきますと、antarikṣaとあり、これは空（そら）のことですが、これを鳩摩羅什は虚空と訳しました。一、二ヶ所は空中ですが、後は虚空です。間違えやすい所ですが、大地の下に虚空の世界があるという時は ākāśa であります。私は上手く虚空の説明ができませんが、無限の拡がりで総てをつつみこむものであります。大地の下を掘っても何も無い。しかし、その下に虚空という世界があってそこから人々が涌き出してきたとあります。その人達の身体は金色に輝いていたとあります。お寺を訪れていただいて仏像を見ていただくと、着色が施してあり、いろいろな菩薩はいろいろなものを持っています。首飾りや花、香炉、それらを持つのが菩薩であります。ところが従地涌出品では金色であったとあります。金色とは何のことでしょう。仏には三二相がありその一つは、お姿が金色であるとあります。すなわち、仏となるように予約された人達が、地涌の菩薩ではないかなとそう思っています。それに大地の下に虚空の世界なんてあるわけが無い、そうすると仏滅度の後の世の中において、この世の中に生まれて、前生において仏と関わりを持った命なのだ、という捉え方がしっかりと出来ている人が地涌の菩薩じゃあないかなと思うのです。その人達がどのような人なのかについては、その人達がお釈迦様から遥かな昔に教を受けて後の世のために準備されてきたんだとあります。ここでも遥かな昔という言葉が出てきます。それが弥勒菩薩にはわからないのです。その言葉の意味もわからないで、弥勒菩薩は質問をされます。その質問がご存知の、頭の毛が黒く二五歳くらいの青年に白髪の老人が、この人は私の

父ですと言い、青年はこの人は私の子どもですと言うようなものだと言います。当たり前のことがひっくり返っているようなものだと弥勒菩薩は言います。弥勒菩薩はお釈迦様の生い立ちから知っていますが、その知識の何処をひっくり返しても大地の下の虚空の人々を教化したなんて話はないからおかしい、と尋ねます。それに対する答えが如来寿量品です。如来寿量品の冒頭には、「如来誠諦之語」如来の誠諦の言葉を信ずべしとこの言葉を三回繰り返しておいでになります。弥勒菩薩をはじめ沢山の人々は、お釈迦様の言う通り信じますから説いて下さいと言います。サンスクリット語に śraddhā という言葉がありますが、これは正しいもの、素晴らしいもの、問題のないもの、こういうものに対して私の心をそちらに預けますよと言う意味です。時間が余ったから信心をしようというのとは違います。そういう約束をうけたうえでお釈迦様はこの世に出現したと説いています。ある時には燃灯仏として出現されます。過去仏といいお釈迦様以前に七人の仏が居たんだという考え方があります。燃灯仏が歩いてきた道がぬかるんでいた、このまま歩き続けると、燃灯仏の足が汚れてしまうというので、自分の衣類を脱いで敷き詰めたがまだ足りない。だから自分が腹ばいになり長い髪をほどいた。その上を燃灯仏が歩いたので足は汚れなかった。こういう功徳を前生においてお釈迦様はつんだため、あっさり仏になったんだという考え方があるわけです。ところが無限の生命を持ったお釈迦様だということを信じることが出来なければいけないんだと法華経はいいます。これは自分の命を前生においてお釈迦様と触れあって、そこからいただいた生命だという判断が出来なければいけないということです。

そして最後の如来神力品では、未来の世の中において法華経を説くべき人は、地涌の菩薩であると示されています。大地の下からただ涌いて生まれてくるだけではなくて、自分の生命を前世におけるお釈迦様と触れあいの生命だととらえているかが問題なのです。如来神力品で受持・読・誦・解説・書写する人がいるならば塔を建ててくれとありま

すが、これは chaitya のことです。stūpa は骨をおまつりする塔のことですが、法華経の中には如来の全身があるというのですから、これは法華経のお経を納めた建物のことで、法華経があるからそこはお釈迦様がおいでになるところであります。これが如来神力品の別付嘱の内容であります。こういう考え方が「法華経と私」というテーマでお話したかった所です。法華経を何だかわからないお経として遠くにおかないでほしい。法華経の中のどの辺に私の座れる場所があるのか。その辺をじっくり見極めてほしいなと、そう念願して最終講義を終わらせていただきます。ありがとうございました。